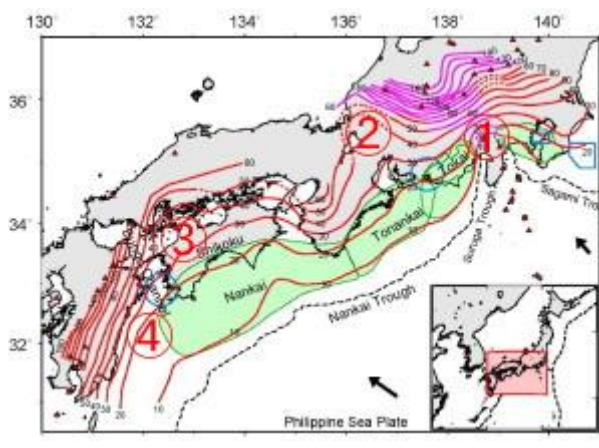


2018年1月17日(水)

フィリピン海プレートが伊勢湾から若狭湾に向けて大きく侵入できた

理論構築-3 鳳来寺山にコールドロンが存在すること



これは一連の仮説立案の継続である。今回のポイントは上図の②の東側に関する。この位置に鳳来寺山コールドロンを主体とするコールドロンが存在する。これらのコールドロンがより、弱い地層を作り、②へのフィリピン海プレートの深い侵入を容易にさせたものと私は推定している。

既に述べたように②の西側の奥には古いコールドロンである琵琶湖コールドがある。それは6000万年前後にユーラシア大陸で活動し、日本に流れ着いた。その南には鳳来寺山コールドロンと伊勢湾を挟んで対岸に熊野コールドロンや熊野カルデラが存在する。

これらはいずれもフィリピン海プレートの日本列島への侵入を助ける役割をしたと私は考えている。なお、駒野や鳳来寺山のコールドロンの活躍は日本列島が大陸から離れ、日本列島がおぼろげに見えだした1400万年以降である。

今回のポイントは②の地域で広くフィリピン海プレートが侵入したのには、一つのコールドロンだけではなく二つの巨大なコールドロンが関係したと述べるのがポイントである。

なお、伊勢湾から若狭湾に向けての地殻に深い傷を作った敦賀湾－伊勢湾構造線や福井-根尾谷ブロック境界線の元は実に古く4000-9000 万年前にすでに存在したことが金折さんの『足元に活断層』の p66-69 に記載されている。

要は、大陸でできた地球の傷が、大陸移動と同時に日本列島に移動してきたのである。なお、こうした古傷が日本で本格的に現状の活動し始めたのはぐっと若く100万前足ごろからである。それは、松田さんの『活断層』の p110-114 に書かれている。

古い傷と琵琶湖コールドとの関係は明確ではない。ただ、年代的には近いし、場所的にも近い。フィリピン海プレートが成立したのは琵琶湖コールドの後、熊野カルデラ噴火のまえである。

この間に、フィリピン海プレートがどのように日本列島に部分的に深く侵入するようになったのか、もう少し調べてみたい。